S.　Ashina

オリエンテーション・　導入：近代キリスト教と政治思想
１．無教会キリスト教の諸問題
２．波多野宗教哲学の射程
　２－１：弁証神学から宗教学・宗教哲学へ
　２－２：波多野宗教哲学の挑戦
　２－３：波多野宗教哲学の射程　6/30
　２－４：他者論――波多野とレヴィナス　7/7
　２－５：象徴論――波多野とティリッヒ　7/14
　２－６：日本キリスト教思想研究の課題と可能性　7/21
Exkurs １：戦後７０年の教会と神学――組織神学の場合　6/23
Exkurs ２：ハイデッガーとキリスト教　7/28
フィードバック

＜前回＞弁証神学から宗教学・宗教哲学へ
（１）概観：弁証神学から宗教学・宗教哲学へ
１．明治のキリスト教思想の基調＝弁証神学
　第一世代：植村正久『真理一斑』(1884)
　　↓　神学部（主に聖職者の養成）から人文学部へ広がる。大正から昭和
２．宗教学・宗教哲学へ：学問としての宗教研究＝専門化
　第二世代：波多野精一
３．広義の宗教学の成立：「神学／宗教哲学／（現代）宗教学」
　東京一致神学校(1877-)
　　→明治学院神学部(1886-)
　　東京神学社神学専門学校(1904-)
　東京帝国大学・宗教学講座(1905-)
　京都帝国大学・宗教学講座(1907-)、基督教学講座（1922-)
４．近代的な「宗教概念」の導入。植村正久『真理一斑』(1884)の意義
（２）近代的知とその状況
５．状況の変化：明治から大正へ
　　教養主義・個人主義、全体主義・ファシズム
６．有効な弁証を求めて＝弁証の学的根拠を問う　→　神学の学的基盤
　・知的営みの条件としての知のネットワーク（学の体系と神学体系）
　・制度的再帰性と近代的知
７．近代＝知の再帰的制度化：
「キリスト教と近代的知――本論文集の序に代えて」(現代キリスト教思想研究会『キリスト教と近代的知』2010 年 1-11 頁)。
1)知と制度化との関わり：古代から一貫して確認可能な事柄。
2)知の公共性：人間が様々な知的活動に基づき知的世界というべきものを構築するには、その活動が公共性を獲得することが必要である。
3)知の再帰性自体は、知自体の基本構造であり、近代的知特有の事柄ではない。しかし、近代的知において、この再帰性は、方法論的な懐疑と実証主義とにおいて示されるように、極度に強化され、こうして獲得された確実な知の原理から包括的な知の体系の構築が目指されることになる。
　(1)神学におけるプロレゴメナ・方法論の肥大化。

近代以降の神学思想において「プロレゴメナ」が神学体系内で有する比重を著しく増大させる傾向にあることは、神学の体系的理論に方法論的基礎を与える作業がきわめて困難になりつつあることを示唆している。これは、組織神学の体系構築がますます困難になりつつあるということにほかならない。

(2)宗教経験との接続を通した実証性の確保。

近代聖書学が、当初こうした問題関心によって動機づけられていたことは、19 世紀のイエス伝研究の状況がよく示している。近代聖書学の方法によるイエス伝叙述が挫折という仕方で総括されるには、A．シュヴァイツァーを待つ必要があった。

(3)諸学の体系内における神学的知の位置づけ。

↓

4)三点からの帰結：神学研究におけるリサーチ・プログラムの導入。

5)知の制度化：近代における顕著な動向として指摘すべきものは、大学・学会・出版の三者が構成する知の制度の発展であろう。

↓

この制度化がキリスト教的知に及ぼした様々な影響。とくに注目すべきは、伝統的な知の主体であった中間共同体の相対化。

6)展望：近代的知はポスト近代の状況において今後何をもたらすだろうか。もちろん、ポスト近代におけるキリスト教的知の将来像については、現時点ではわずかに予想することができるに過ぎない。

しかし、近代的知がもたらした方法論的反省の強化と近代的な制度化が、ますます進展し、たとえば、知の大衆化をさらに促進するものとなることは十分な蓋然性を有する見通しであろう。大学と出版に対する大衆化の作用は著しいものがある。問題は、この近代からポスト近代への動向が、それを生み出した近代的知自体を解体するに至るかということであろう。特定の階層や集団によって担われてきた知的世界全般――たとえば芸術なども――が、さらなる変貌を遂げつつあるとすれば、キリスト教的知もその中で進むべき道を模索せざるを得ない。

（３）知を分析する

８．知の歴史性あるいは考古学

ネットワークの変動、公共性の変容

↓

９．近現代：自然科学、テクノロジーの肥大化

科学技術、高齢化、環境　→　（後期）

（４）付論：2009 年度・日本宗教学会・パネル　**戦前日本におけるキリスト教研究**

２．波多野宗教哲学の射程

２ ― ２ ：波多野宗教哲学の挑戦

（０）波多野精一の概略

１．『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局）より

波多野精一（1877.7.21 ～ 1950.1.17、明治 10 ～昭和 25）

宗教哲学者、長野県（松本町）に生まれる。第 1 高等学校から東京帝国大学文科大学哲学科へ、大学院で R.ケーベルに学ぶ。1900 年、東京専門学校（現在の早稲田大学）講師となり、西洋哲学史を講義。04 年より、ベルリン、ハイデルベルク大学に学び、ハルナック、ヴィンデルバンドらに師事。帰国後、東京帝国大学で原始キリスト教を講義。1917 年京都帝国大学教授となり宗教学講座を担当。47 年に玉川学園大学教

授に招聘。

『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序論』(1940)、『時と永遠』(1943)

２.『京都大学百年史／部局史編１』第２章より

波多野精一（1877 ～ 1950）が大正 6（1917）年 12 月に宗教学講座に着任キリスト教の学術的研究のため寄付された渡辺荘奨学資金により、大正 11（1922）年 5 月本講座が宗教学第 2 講座として設置され、波多野がこの講座を兼担することになった。波多野は、原始キリスト教、パウロおよびヨハネの宗教思想、宗教思想史等について講じ、退官後発表された『時と永遠』(1943 年）のような、キリスト教の立場に基づく宗教哲学をも構想しつつあった。波多野の厳密なテクスト読解と深い宗教哲学的思索とが、本講座の礎石を据えたといってよい。

波多野は、昭和 2（1927）年、本講座の兼担を解かれて分担となったが、昭和 12（1937）年 3 月には宗教学第 1 講座から本講座の担任者となり（第 1 講座を分担)、本講座は初めて専任教授を持つことになった。しかし同年 7 月に波多野は停年退官し、昭和 23（1948）年まで講座担任者のいない状態が続くことになった。

３．宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部。

生涯と思想的発展、波多野宗教哲学の立場と方法、生の三段階、宗教の本質と類型、人格主義の宗教

竹田篤司『物語「京都学派」――知識人たちの友情と葛藤』中公文庫、2012年。

４．宗教哲学形成過程

『西洋哲学史要』(1901)

『基督教の起源』(1908)

「スピノザ研究」(大学院卒業論文、1910)

「カントの宗教哲学について」(1913)

「歴史の意義に関して――ギリシア思想とヘブライ思想と」(1922)

・西洋思想史研究（哲学＋キリスト教思想）に基づく宗教哲学構築

哲学史研究者（古代ギリシャ哲学と近代哲学、特に観念論的系譜）

キリスト教思想研究者（聖書学、宗教改革、神秘主義）

現代宗教学（経験)、宗教研究の哲学的方法論的な反省

↓

・宗教哲学

宗教を人間の生の営みにどのように位置付け、理性的な理解にもたらすか（哲学）

具体的な宗教経験に即した・それを正当に扱いうること（宗教的基盤・体験）

５．波多野精一『波多野精一全集』全六巻、岩波書店、1969年。

『時と永遠　他八篇』『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012年。

（１）生涯

幼年・修学時代（1877 ～ 1899 年）／早稲田大学時代（1900 ～ 1916 年）／

京都帝国大学時代（1917 ～ 1937 年）／退官後から晩年期（1938 ～ 1950 年）

６．石原謙：「彼は平生自己について多く語ることを欲しなかったし、その書き残したものの中にも自伝的な文章は殆ど見当らない。従ってわれわれの叙述も必要な限りに留めるのが妥当であらうし、また其以上に語ることは困難である」。(石原謙「序説　生涯と学業」、石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己『宗教の哲学の根本にあるもの――波多野精一博士の学業について』岩波書店、1954 年、6 頁)

７．早稲田大学時代：東京帝国大学大学院でケーベルの薫陶を受けつつ、卒業論文『スピノザ研究』の完成（1904 年）に向けて研究に集中する一方、東京専門学校（早稲田大

学の前身）の講師。

・『西洋哲学史要』（1901 年、24 歳）

・1905 年からドイツ留学。ベルリンとハイデルベルクの両大学で、哲学、キリスト教神学と聖書学　→　東京帝国大学での「原始キリスト教」の講義（1907）

『基督教の起源』（1908 年、31 歳）

1917 年夏の大隈重信侯銅像建設問題に端を発した騒動を期に大学教授を辞する。

８．京都帝国大学時代：京都に転居し。哲学講座に移った西田幾多郎の後を受けて宗教学講座を担当し、一九三六年まで宗教学講座において研究と教育（在職最後の年は、基督教学講座（宗教学第二講座）を担任し宗教学講座は分担）。

・三木清や田中美知太郎

・テキスト原典の厳密な読解に基づく思想研究というスタイルを確立。

・波多野宗教哲学三部作。『宗教哲学』（1935年）

９．退官後：同志社大学と関西学院大学で講義。

『宗教哲学序論』（1941 年）を出版、1941 年戦争の危機が高まる中で東京への転居。日本神学校で臨時講義を行う以外は著述に専念。『時と永遠』を一九四三年に刊行。岩手県千廐町に疎開し、そこで敗戦。

戦後、玉川学園へ。

10．波多野自身の宗教的体験の詳細については、知ることができない。

波多野は東京帝国大学卒業の前後から、一番町基督教会（後の富士見町教会）に出入りし、牧師植村正久から洗礼を受け（1902 年頃）、そして生涯キリスト者として生きた。

「波多野宗教哲学の根底にある信仰は確かに正久から受継いだものであり、その信仰を弁証論的に宗教哲学的に展開しようとしたという点においては、『真理一斑』を継承するものだったと言ってもよいであろう。」（雨宮栄一『若き植村正久』新教出版社、2007 年、327　頁）

「学者としての使命を果たすために、自分の努力を学問的研究以外のものに向けなかった。」（宮本武之助『波多野精一』日本基督教団出版部、1965 年、36 頁）

（２）波多野宗教哲学の形成過程

11．波多野宗教哲学自体の形成過程：40 歳で京都帝国大学に教授として着任してからの 20 年間。

・宗教哲学の土台は、早稲田時代にはほぼ確立。『西洋哲学史要』『基督教の起源』。

哲学史におけるカントの批判哲学と、イエスあるいはパウロの宗教的体験との意義が明確に意識されていたこと、そして思想史が哲学と宗教とを包括するものとして理解されていた。

・宗教哲学体系の形成：

第１期（宗教哲学形成の胎動期）1917 年の京都赴任から 1926 年（大正末）頃まで。

1920 年の「宗教哲学の本質及其根本問題」の前後で時期を区切る。

第２期（研究の緒が見出され体系の原理が築かれた）

第３期（完成期）1935 年から 43 年

12．波多野の宗教哲学構想を導く２つの問い：

1)近代以降の思想状況において従来の宗教哲学を乗り越える宗教哲学の哲学的基礎はどこに求められるのか。宗教「哲学」。

2)宗教自体の要求に適切に応答する宗教哲学とは何かという問い。「宗教」哲学。

↓

1) に対する結論：「正しい宗教哲学」はカントの批判哲学の上に構築される。第一期の前半には到達されていた。

13．第二期：沈黙の 10 年＝苦闘の時代。基督教学講座を独立した講座として確立するために波多野が苦労した時期。

・1920 年代以降の哲学や神学の新しい動向が生みだした困難。

・2) の問い。

（３）近代の知的状況と宗教哲学

14.「誤れる宗教哲学」→「正しき宗教哲学」

・思想世界が啓蒙主義の決定的な影響下にあった近代という時代にあって、宗教を積極的に論じること。

・実証主義的学の理念にしたがった宗教学（＝現代宗教学）：宗教心理学

コントの実証主義、フォイエルバッハ

事実に基づいて確実な知を追求するという実証主義の態度自体は、宗教研究においても妥当するもの。しかし、事実性の尊重は、実証主義者がしばしば素朴に前提するような仕方で宗教あるいは宗教哲学の廃棄を帰結しない。

15．自然主義に陥った実証主義的宗教研究：「必然的帰結として宗教の否定に導く」、「宗教の事実を曲解しその真相を歪曲する」（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、16 頁）実証主義は認識論的相対主義を帰結することによって、宗教的体験が志向する体験の実在性（志向対象の絶対的実在性・神聖性）の意味を正当に扱うことができない。

↓

・「事実性」の問い直し。事実は意味あるいは理解と関連することによってはじめて、知の対象となる。いわゆる「生の事実」といったものは人間の経験においては存在しない。

↓

経験的な事実に基づく宗教と、その反省的自己理解としての宗教哲学は、実証主義的な方法論に基づく宗教研究（たとえば、宗教心理学）においても、その意味を失うことはない。

16.『宗教哲学序論』で「誤れる宗教哲学」と呼ばれる合理主義的宗教哲学の立場。

神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、「神の学」。それは、アリストテレス以来「神学」と呼ばれ、キリスト教の神論においても採用された立場、その典型として挙げられるのが、神の存在論証を含む自然神学（アンセルムスとトマス・アクィナス）。

↓

カントによる神の存在論証批判により、伝統的な自然神学は近代以降の知的状況においてその妥当性を失った。

神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。ティリッヒ。

17．正しき宗教哲学：神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間的生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。

18．超自然主義の神論：合理主義的宗教理論の対極にあると考えられるも、いわば広義の合理主義として、誤れる宗教哲学に分類される。超自然主義は、「合理主義とは対立の関係に立ち全く異なる傾向を示しながら、宗教の対象を直接に理論的認識の対象とする点においては共通なる哲学的意義」（同書、47 頁）。一つの学として可能になるためには、合理主義と結合することが必要。この超自然主義と合理主義との模範的な結合としてあげられるのが、トマス・アクィナスの神学。

19.『宗教哲学序論』の「正しき宗教哲学」とそれに基づく『宗教哲学』の体系的叙述。

「宗教的体験の理論的回顧それの反省的自己理解」＝批判哲学＋実在論

20．カントの批判哲学にこそ宗教哲学が辿るべき「正しい道」が見出される。

・「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）

カントは、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」（『時と永遠他八篇』岩波文庫、279 頁）という批判主義の根本精神を、まず認識論において確立し、「次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった」。

↓

カントはこの新しい宗教哲学を徹底した仕方で遂行したわけではない。

波多野宗教哲学＝カント批判哲学の宗教哲学における徹底化（ヴィンデルバント「カントを理解することは彼を超越すること」）

・「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異って、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、二八〇頁）。

人間の営みとしての宗教を対象とする宗教哲学構想は宗教哲学の人間学化あるいは人間学的転回（パネンベルク）

W. Pannnenberg, *Theologie und Philosophie. Ihre Verhältnis im Lichte ihrer gemeinsamen Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, S.184-195.

・カント主義の形式的理想主義と反主知主義。

人間の精神的諸活動についてその「事実問題ではなく権利問題」を問うということ、

つまり、「それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」と先に述べた批判主義の精神。

カント主義が理論理性を超えて「普遍妥当的なる価値」を認めうるすべての領域を含むこと。「理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂い」（同書、282 頁）だからである。理論理性に理性を限定する主知主義（合理主義）に対して、宗教にも理性を根底にもった固有の価値を認めることが、正しき宗教哲学を可能にする哲学的根拠。

21．シュライアマハーの「高次の実在論」にしたがい、宗教的実在論に立った宗教哲学の構築を試みる。→　解釈学

・神ではなく宗教、つまり宗教的体験が宗教哲学の対象。

・宗教的体験＝宗教哲学が前提とすべき事実。この事実を人間存在における意味との関わりにおいて解釈する。

・歴史的他者の体験はそれが表現され伝承されることを通して研究者にもたらされるのであって、その事実には解釈が不可分に伴っている。歴史は出来事であるとともにその物語だから。

他者の体験と研究者自身の体験との関連づけ。

↓

事実としての宗教的体験は、研究者自身の体験との関わりで理解されねばならず、ここで解釈という営みが前提となる。

・波多野宗教哲学の対象とする事実が意味を内包する事実であることから、宗教的体験の「理論的回顧それの反省的自己理解」という解釈学的作業が帰結する。

22．思想史研究を土台とした宗教哲学。『宗教哲学序論』「第四章　歴史的瞥見」。

ルターとカントに決定的な位置を与えている。カントの批判哲学とルターの宗教的体験、この二つは、「宗教的体験の理論的回顧それの反省的自己理解」と定式化された宗教哲学の思想史的根拠というべきである。

（４）波多野宗教哲学の構成・内容

23.『宗教哲学序論』「第三章　正しき宗教哲学」（同書、84-108 頁）。
　　宗教哲学体系の本論と各論：宗教本質論／類型論／人間学
　　cf. ティリッヒの学の体系論：宗教哲学／宗教史／規範的体系的宗教学
　　相関の方法：哲学的人間学／宗教的象徴の解釈学

24. 宗教本質論＝波多野宗教哲学体系の中心：「宗教哲学の問題は簡単にいえば本質論に尽きる」（同書、95 頁）。
「すでに論じた如く宗教の学的研究は事実の内面的意味を前提にせねばならぬ。この内面的意味は体験において与えられまた知られる。合理主義の宗教哲学と異なって正しき宗教哲学は宗教的体験の反省的自己理解、それの理論的回顧として成立つ。体験の立場に立つものは宗教が他と混同を許さぬ固有の意味内容を有するを知る。かかる意味内容を反省に上せ、それの理論的理解を原理へと推進めて行くものは本質の観照把握に到達してはじめて満足を見る。この本質の理解こそ宗教哲学である。」（同書、84 頁）
　宗教的<u>体験</u>→ <u>理論</u>的回顧→<u>反省</u>的自己理解→「本質の観照把握」
　　現象学の本質直観に相当する作業。

25. 歴史的な個別的な現象（体験とその表現）から類型を経て本質に至る過程の中に、この本質直観は位置づけられる。波多野宗教哲学は現象学的である。

26. 宗教の本質理解の内容：
『宗教哲学』の第一章の冒頭において、シュライアマハーの「高次の実在主義」と関連づけつつ、「宗教において自我は現実世界を超えて遙かに高き実在との関係に入る」（同書、171 頁）。つまり、高次の実在との関係・交わりこそが宗教の核心を構成するものであり、波多野は、この実在を愛の関わりにおいて人格として出会う他者、神聖性を有する絶対的他者として説明してゆく。

27. 宗教類型論：本質直観がなされるべき直観の素材（典型的事例）を与える。

28. 哲学的人間学：絶対的他者の意味を明らかにするには、人間的生のあり方を他者関係において解明する。
「更に立ち入っていかなる具体的論究が行われるかを考察すれば本質論と関連しつつまたそれのうちに包含されつつ、ここに比較的独立なる研究の部門を構成する諸問題がおのずから別れ出るのを見る。類型論的と人間学的との二つの研究が即ちそれである」（同書、95）。

29. 宗教的類型論：新カント学派（ヴィンデルバントやリッケルト）の類型論やウェーバーの社会学的類型論。
　類型は、個性と普遍、あるいは個体と本質との中間に位置し、媒介的意義を有している。一方で、類型は個性に対しては普遍の側に立つが（「類型は事実の比較によって得られる抽象的産物」）、他方同時に「飽くまでも個性を指ざし個性の香りを留める」。
　類型：歴史的事実から類型を介して本質へという上昇的思惟と、本質が類型を介して歴史の世界に具体的形態において反映するという下降的思惟との双方の思惟の運動が交差する場。

30. 人間学：カントやシュライアマハーの古典的な議論が存在することはもちろんであるが、より直接的には、シェーラー、ハイデッガー、そしてブーバーの哲学的人間学が意識されている。
　藤田正勝「一九二〇年代のヨーロッパの哲学と日本の哲学の形成・発展」（京都哲学会『哲学研究』592、2011年、1-21頁）。

＜参考文献＞

１．石原謙編『哲学及び宗教と其歴史――波多野精一先生献呈論文集』岩波書店、1938年。
２．石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己
『宗教と哲学の根本にあるもの――波多野精一博士の学業について』岩波書店、1954年。
３．『追憶の波多野精一先生』玉川大学出版部、1970年。
４．京都哲学会『哲学研究』第 406 号（波多野精一博士追悼号）。
５．浜田与助『波多野宗教哲学』玉川大学出版部、1949年。
６．宮本武之助『人と思想シリーズ　波多野精一』日本基督教団出版部、1965年。
『宮本武之助著作集　上下』新教出版社、1991/92年。
７．側瀬登『時間と対話的原理――波多野精一とマルチン・ブーバー』晃洋書房、2000年。
８．大林浩『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局、1981年。
９．安藤恵崇「時と永遠への思索――波多野精一」、藤田正勝編『日本近代思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997 年、118-135 頁。
10．片柳栄一「時と永遠――波多野精一」、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998 年、257-286 頁。
11．原口尚彰「日本新約聖書学史における波多野精一」、
『キリスト教史学』（キリスト教史学会）第 60 集、2006 年、87-102 頁。
12．村松晋「波多野精一と敗戦」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 1 号、2006 年、63-72 頁。
「波多野精一の時代認識」、『聖学院大学論叢』第 19 巻第 2 号、2007 年、140-146 頁。
13．佐藤啓介「愛ゆえに、我在り――田辺、波多野、マリオンと存在－愛－論」、
片柳栄一編『ディアロゴス――手探りの中の対話』晃洋書房、2007 年、216-236 頁。
・「波多野精一の存在－愛－論」、『日本の神学』（日本基督教学会）46、2007 年、31-52 頁。
・「神の言葉の器としての人間――波多野精一の象徴論の存在論的再解釈をめざして」、『聖学院大学論叢』第 22 巻第 1 号、2009 年、181-189 頁。
14．鵜沼裕子「日本キリスト教史における「他者」理解をめぐって　波多野精一の場合」、『聖学院大学総合研究所紀要』第 41 号、2007 年、132-160 頁。
15．芦名定道「日本の宗教哲学とその諸問題―波多野、有賀、北森―」、『アジア・キリスト教・多元性』第 9 号、現代キリスト教思想研究会、2011 年、89-111 頁。
・「思想史研究の諸問題――近代日本のキリスト教思想研究から」、『アジア・キリスト教・多元性』第 10 号、現代キリスト教思想研究会、2012 年、1-18 頁。
・「宗教的実在と象徴――波多野とティリッヒ」、『近代/ポスト近代とキリスト教』現代キリスト教研究会、2012 年、3-22 頁。
・「波多野宗教哲学における死の問い」、『キリスト教学研究史紀要』第 1 号、京都大学キリスト教学研究室、2013 年、1-17 頁。